

附属坂戸高等学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践

附属坂戸高等学校 藤原 亮治

本校は2014年度より、文部科学省からSGHの指定を受け、グローバル社会に資する人材を育成する教育実践の重点活動として「オリンピック・パラリンピック教育」を位置づけ、学年全体で取り組んでいる。前年度の活動から発展したことや新たに加わった活動についていくつか紹介する。

筑波大学附属坂戸高等学校 オリンピック・パラリンピック教育年間指導計画(2016:体育科・福祉科関連分)

学年	教科	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1学年	LHR 産業社会と人間	特別支援学校との交流学習 クラスごとで年一回附属または近隣の特別支援学校と交流											
	体育	← バレーボール I 「基礎技術の理解」 → ハンドリング確認補助ゲーム「シッティングバレーボール」 カバリングダンスキル曲上ゲーム「ペンボール」						持久走 オリンピックとの有酸素能力比較					
2学年	自由選択科目 体育を科学する	ICTを用いて「バイオメカニクス」「運動評価」を学ぼう 50m走・ハンドボール → オリンピアンと動作比較分析 →			共同学習 事前指導	スポーツ交流 I in大塚	ボランティア学習事前指導 アダプテッドスポーツ体験学習	アダプテッドスポーツを考えよう I	スポーツ交流学習 II in坂戸	スポーツ交流学習 III in筑波			
	自由選択科目 福祉援助技術	← バレーボール II 「設備理解」 → 簡易ゲーム「レクリエーションバレーボール」			知的障害とは		障害者スポーツ ボランティア学習		アダプテッドスポーツを考えよう II				
3年次	体育 体育理論							アダプテッドスポーツにチャレンジ フライングサッカー・ゴールボール オリンピックの記録と技術の関係	持久走 地域スポーツへの参画に関する準備				
	課外活動・行事							パラリンピックを変えるテクノロジー 共生社会シンポジウム ブース運営	地域のスポーツ行事参加 校内マラソン大会 with 坂戸チャリティマラソン	ニュースポーツにチャレンジ アルティメット・インディアカ ・ネオホッケー	クワベルタン 和崎治五郎 ユースフォーラム	青年学級交流	青年学級交流

1) 特別支援学校とのスポーツ交流学習 (体育科・福祉科)

本単元は様々な体験・交流学習をもとに「日本における障害者と健常者についての心のバリアフリーに関する課題」の解決について学習した。それぞれの授業の目標は以下のとおりである。

- 「体育を科学する」 スポーツの有する個人的・社会的に豊かな価値を理解し、それら活動を主体的に行う・支える・観る資質についてスポーツを科学する視点から身につける。
- 「介護福祉基礎」 援助が必要な人が“地域”で生活を送ることを考える。知識及びその技術を学習し、適切に行う能力と態度を身につける。

1学期はそれぞれの科目で基礎的な知識・スキルを学び、2学期に協働単位として「パラリンピック教育」を設定した。

単元の目的 パラリンピックが開催されることの意義について理解するとともに、日本で行われている障害者スポーツへの理解を深める。また健常者と障害者がノンバーバルな社会環境を築くために、

- (体育を科学する) スポーツがどのような価値を有しているかについて考える。
- (福祉援助技術) 現在の障害者と健常者を取り巻く社会環境について理解を深め改善を考える。

筑波大学附属大塚特別支援学校の生徒 (以下「大塚生」と) 8月25日(水) 26日(木) と11月11日(金)、12月17日(金)の計4日交流を行った。障がいなどの多様さを認め包含していくことは、自分が所属する集団の中にある多様さを認めることの延長線上にある。昨年の活動が協働性・共同性の活動であった反省から、今年度はよりそれぞれの専門性を活かせる形で行った。そうした活動を通じて、ある生徒が「今までは“障害者”という線の色が濃かったが、交流を通して段々と薄くなっていった」と述べたように、自分が所属している集団とは別の集団として障がい者がいるという認識ではなく、同じ集団(社会)のなかに障がい者もいるという認識を得ることができた。



アダプテッド・スポーツ開発会議



考案スポーツ「クワッドゴールボール」



全ての交流を終えて記念撮影

2) ドイツヘッセン州スポーツユエグントの学生とスポーツ・ディスカッション交流 (体育科・英語科)

体育協会の日独交流プログラムに本校が協力する形で行われました。スポーツを多面的に捉え、その価値と活用について探

求める科目「体育を科学する」の受講生徒と、英語の流暢性と思考力を高める課外授業「ENGLISH CARAVAN」受講生徒が協働して企画立案を行い、①スポーツ交流 ②日本の学校および文化紹介 ③「フェアプレーとは何か」についてのディスカッションが行われた。

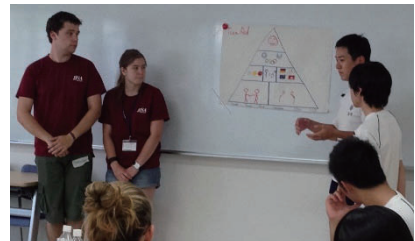
対面時は緊張を隠せずにいた両学生も、「キンボール」というコミュニケーションを図りやすいスポーツを通じて打ち解け、より言語スキルを必要とする活動へスムーズに移行することができた。「フェアプレー」についてその概念的意味や価値をディスカッションする際には、ドイツの学生（16～22歳）の英語力や概念理解の高さに驚きながらも、協働して成果を得ようと必死にチャレンジする姿、相手の国民性からくるアプローチの違いを受け入れ、よりよい議論を進めようとする生徒の姿があった。



キンボールでスポーツ交流



かるた部による実技披露



成果発表の様子

3) 体育における「ニュースポーツ・アダプテッドスポーツ」の積極的導入

学校で必修として実施される最後の「体育」は、主体的に身体活動を継続していく素養を育むために全員が受ける最後の教育機会といっても過言ではない。多様な人に開かれた社会の中で、誰とでも、どこでもスポーツを楽しめる人材の育成には、スポーツの楽しさの認識を「強化」「拡充」していく必要がある。本校では3年次の科目「体育」において、アダプテッドスポーツ（6時間）レクリエーションスポーツ（10時間）を組み入れ、多様なスポーツを経験することで、スポーツの本来的な楽しさを再確認しながら、多様なスポーツを楽しむ人々の「卓越性」や「個性」を理解・尊重し、「協働」を楽しむ素養の獲得を目標に実施した。

今年度実施したスポーツは以下のとおりである（これらの中から選択し3種目を実施）

- ・キンボール ・ゴールボール ・ブラインドサッカー ・水球 ・ネオホッケー
- ・アルティメット ・インディアカ ・スナッグゴルフ

4) 国語科の取り組み

1年次の国語総合において、各クラスの担当教員がオリンピックを教材とした授業を実施した。実施した内容と目標は以下のとおりである。

① 「新聞記者に挑戦」

目標：オリンピックの新聞記事を読み、見出しを考える活動を通して、効果的に表現するための工夫に気づくとともに、スポーツ報道やオリンピックについて考えを深める。

② 「キャッチコピーについて考えるオリンピック競技大会とは」

目標：1964年東京オリンピックの大会ポスターについて理解させ、「相手や目的に応じて題材を選び、効果的な表現を考えて書くこと」の指導を行う。オリンピック競技種目ごとの身体性について理解しようとする意欲を育むと同時にポスターが果たす役割やキャッチコピーの有効性について考えることができる。

生徒の感想として「普段スポーツをしない自分でも、見出しからスポーツをとらえることは新鮮であり、これからやってみようという気持ちが変わった。」「スポーツの写真を見ると自分も近くにいるような不思議な気持ちになれて高揚感を感じることができた。3年後のオリンピックが楽しみである」といった意見が聞かれた。

(国語総合)30) 1年()組()番()

よりよい表現を求めて～新聞記者に挑戦！～

1. 新聞の特徴
 (1) 文章の特徴
 ○ [5WH] の要素を入れる。
 ○ [逆三角形] で作られる。

(2) 紙面構成 (トップ記事)
 a カット見出し
 b 主見出し
 c 副見出し
 d リード

2. 見出しを考えよう～オリンピック記事を題材に～
 ○ 見出しとは「記事の [エッセンス] を [短く簡潔] に伝えること」である。
 ○ 記事を読み、空間に入る言葉を考えよう <半角>の記号で構成できそうな場所に線を引く
 ① ○を元に、おもしろい言葉を考える

(2) 本稿
 * 生徒の考え
 A [輝く] の [輝く] 理由：半空で輝く姿が美しいから。
 B [夢] の [輝く] 理由：夢が実現する。
 C [笑顔] の [輝く] 理由：笑顔が溢れるから。
 * グループの意見 * 先生は必要に応じて質問
 A [笑顔] の [輝く] 理由：笑顔が溢れるから。
 B [笑顔] の [輝く] 理由：笑顔が溢れるから。
 C [笑顔] の [輝く] 理由：笑顔が溢れるから。

どのカット見出しも、すべてが興味を持って見てもらえるように、
 中々得るものは無いという思いがあり、大抵の目撃者を見ても、
 自分もその近くにいるような不思議な気持ちになり、
 高揚感を感じることができた。3年後のオリンピックが楽しみである。